

## 御坊さん

## お墓に掌を合わす時

大阪府 浄土真宗光恩寺住職

若林 真人

お墓というものは、宗教の違いはあれど世界各地に存在します。日本のお墓信仰には儒教の影響が大きいとの指摘があるのですが、ともあれ、仏教のお墓の起源はお釈迦様に始まると言ふべきでしょう。お釈迦様がクシナガラで入滅され荼毘（火葬）にふされた時、遺骨（仏舍利）は八つの部族に分けられ、その遺骨を持ち帰った人たちはそれぞれの国にお釈迦様を偲ぶストウパー（仏舍利塔）を建立されたのです。

さて、浄土真宗のお墓はどつあるべきか、これには様々な意見があるのですが、たとえ、親鸞聖人は「それがし 親鸞 閉眼せば、賀茂河にいでて魚にあたふべし」と語られたことによつて墓を持つべきではないという意見もあります。しかし、その親鸞聖人の御廟所が親鸞聖人を慕つお方々によつて護られ、やがて寺院化して本願寺となったのです。そこには死者を祠るといふ発想はなく、その人格を慕つということが出発点だったので。

親鸞聖人を慕つ真宗門徒の中には、個人の墓を持たないで、親鸞聖人の大谷の御廟所に納骨

年刊 『御坊さん』 第5号

平成 13 年 8 月

発行 亀山本徳寺・本徳寺廟所墓地管理部

姫路市亀山三二四・35-0242

編集 真宗文化研究室・責任者 大谷昭仁

するばかりという地方も各地にあります。個人の墓を持つとしても、死者を祠るといふことではなく、亡き人を慕う場所であるとするべきでしょう。それには浄土真宗の死生観が重要なのです。亡き人を決して迷いの存在とは見ないのです。供養しなければ浮かばれない存在ではないのです。



阿弥陀様は「この弥陀にまかせておくれ、この弥陀はあなたの身に入り満ちる仏なんだよ。ほんとうに安心して我が浄土に生まれるとおもつて、お念仏の身となつておくれ。必ず救つ、間違わさんぞ」と願つてくださる仏様です。今この身に入り満ちていくくださるすがたがお念仏なのです。その阿弥陀様の願いの中に迷いの境界を離れ、娑婆の縁尽きてお浄土にお生まれになった、それが亡きお方なのです。

広島県竹原市のあるお寺に「縁を頂いた時のこと、お御堂の裏に墓地がありました。何げなく眺めてみると、墓石の正面に刻んだ文字が「家の墓」ではなく、何か見慣れぬ文字でした。何と刻んであるのだろうかと近づいて見れば、それぞれが実にふさわしい法語だったので。きつとご住職の発案でしょう。それぞれの意味をを「門徒方が受けとめられて刻まれたに違いありません。

どんな法語かと言え、

『阿弥陀経』の「俱会一处」は勿論のこと、

『お正信偈』の「真如法性身」「無量光明土」

「法性之常楽」「寂靜無為楽」。

『浄土論』（天親菩薩）の「如来浄華衆」

「正覚華化生」「功德大宝海」。

『往生論註』（曇鸞大師）の「同一念佛」

「無別道故」などなど。

亡きお方のお姿をとどめるものはお骨のみです。それを納めたお墓に合掌する。亡きお方はそこにいなさるわけではない。今はお浄土にお生まれになつて「如来浄華衆」、きよらかなお悟りの仏様となられたのです。ね「正覚華化生」「法性之常楽」「寂靜無為楽」。私も同じお念仏の道を歩ませて頂き「同一念佛」「無別道故」、同じお浄土に参らせて頂きます。お釈迦様が「俱会一处」と説かれたように、また会える世界があったのです。ね。あなたはお悟りの世界から「真如法性身」「無量光明土」、この私の所に還り来たつて、片時も離れず護り導いてくださるのです。ね。と、お墓の文字が掌を合わす私に語りかけてくださいました。

お墓の形態はどのようであれ、こんな思いでお参りいただけたらと思います。亡きお方を不安の材料にすることなど全く無用のことなのですから。